

大円寺の菊まつり

澤 功（澤の屋旅館主人）

※この記事は日観連機関誌の2006年12月号に掲載されました。

「今晚、近くの大円寺で菊まつりがあります。日本の伝統的な楽器による雅楽の演奏と、これも伝統的な日本舞踊があります。とっても素晴らしいですから五時までに帰っていらっしゃったら、私がお案内いたします」と、出かけるお客様と、チェックインしたお客さま全員に菊まつりのポスターを指さしながら誘いました。

当日の宿泊客二十一名の中八名の人が参加してくださいました。近くの根津神社で息子さんが日本の娘さんと結婚式をあげるので泊まっているドイツのご夫婦、お得意さんのアメリカの大学の先生、去年も泊まってくださったアメリカのエンジニアのお父さんとお嬢さん、リタイアしたアメリカの男性、エンジニアの若いイギリスの女性、それに図書館勤務のオランダの男性、私を含めて総勢九名で会場の大円寺に向いました。

ところで、二年ほど前の話ですが、私どものフロントで販売している地域雑誌「谷中、根津、千駄木（谷根千）」の本を配達に来てくれた森まゆみさんのお嬢さんに「澤さんが菊まつりの時に連れて来たドイツの人と、町の人が会場で友達になって、ドイツに行った時訪ねたら、すごく歓迎してもらったんですって。そのドイツの人が今日本に来て、その人の家に泊めてもらっているんですよ」と言われて、「えっ、それは澤の屋の敵だ」と言っただけでしたが、実は私にとってはうれしい話なのです。

旅の思い出は、その国の人との触れ合いや、ちょっと親切にされたことが、いつまでも忘れられないと泊まりのお客さまに言われて、それなら町の人と泊りのお客さまの交流の橋渡しが私の役目と思うようになったのです。だから、こんな交流が生まれるのは、私にとっては願ってもないことなのです。

ところで、夏目漱石の「三四郎」で有名な団子坂の菊まつりは、明治の末から途絶えていました。

それをすし屋の野池さんと町の人たちが力を合わせて、大円寺の菊まつりとして復活させました。プロの手を借りずいっさいが地元の人たちですから、菊の鉢植えの売り手も、ヤキトリ、タコ焼きの作り手も、地元の青年部と婦人部の人たちです。家が留守になるので子供たちも参加して、終日賑わっています。これが今年で二十二回目を迎えました。

その第一回目から、毎年、出雲流地唄舞の出雲蓉先生がボランティアで出演しています。

寺の本堂の階段を舞台に見立て、緋モウセンの上で地唄舞を舞うのですが、私はそれをはじめて見て感激しました。木立の中のかがり火に照らされた荘厳な雰囲気の中で舞う姿の動と静の美しさ、特に目の輝きに魅せられました。

そこで、来年は外国のお客さまに是非見て貰いたいと

思い、それ以来毎年お客さまを誘って出かけるのが、私の年中行事になりました。

今年の菊まつりは晴天に恵まれました。境内に入ると菊の鉢植えが所狭しと並んで、金魚すくいや焼ソバなどの出店も数多く出ています。

やがて司会者の「例年外国のお客さまも見えて国際色豊かなまつりになりました」という紹介があつて雅楽が演奏され、その次に地唄舞がはじまりました。毎年、その美しさに圧倒されます。終ると会場から拍手が鳴り響きました。私どものお客さまも、私の周りに集まってきて「ワンダフル」とか「エクセレント」とか言いながら「サンキュー」と言ってくださいました。

菊まつりでの私のもう一つの楽しみは「谷根千」を発行している主婦たち、森まゆみさん、仰木ひろみさん、山崎範子さんに会うことです。

はじめての菊まつりに、この雑誌の第一号が発売され、子供さんたちと一緒に雑誌と菊酒を竹筒に入れて売っていました。そこで出会って以来皆さんは私の友だちです。子供さんたちは今では成人し、また森まゆみさんは地元出身の有名な作家になりました。

今年も、竹筒の菊酒を一杯ずつ外国のお客さまにご馳走して、私は踊りがはじまるまで飲み続けです。家内には、外国のお客さまに喜んでもらうためと言いながら、実は菊酒が飲めることが私の大きな楽しみになっているのです。